玄室からはほとんど遺物は出土しなかったが、スロープ状を呈していたと推定される前庭部からは、 須恵器高坏・蓋坏や丹塗土師器が出土している。

1号横穴墓

1号横穴墓は同支群中最も南側に位置し、 $2\cdot 3$ 号横穴墓からはやや離れた位置に造墓されている。造墓位置は凝灰岩と凝灰質砂岩の界面にあたり、床面が凝灰質砂岩であるのに対し、天井部・壁面は凝灰岩となっている。開口方向は $N\sim 81^\circ \sim E$ で、前方にスロープ状の前庭部があったと推定される。前庭部

幅は玄室側で約1.4m、長さは4.18m以上を測り、横穴墓掘削時の排出ブロックを利用してスロープ状に造っていた可能性がある。正面右側が削平されているため、平面的な広がりは不明である。 遺物は須恵器高坏・蓋坏、丹塗土師器などが出土している。

羡道

幅は玄室側1.09m、前庭部側0.92m、長さは正面左側0.73m、同右側0.92mを測り、玄室に近い程広くなる。また玄室正面右側が狭い分、こちら側の羨道が長く造られている。

遺物は出土しなかった。

玄 室

幅2.27m、長さ1.88mを測る、横長方形を呈し、左袖0.66mに対し右袖0.26mで、玄門は正面右寄りに位置する。一方、左袖奥行1.85mに対し右袖奥行1.73mで、正面左側に広いスペースを造っている。 天井形態は寄棟式妻入を呈し、四注線、軒線、各壁面の界線は、工具により界線を明確化している。 界線は天井部正面左奥と壁部正面右手前に付け直しが見られる。

天井・壁面・床面は多数の工具痕が確認でき粗雑な造りである。天井・壁は、各面の界線や工具痕の新旧関係から側壁・天井部(奥壁側・玄門側)・天井部(左右)・棟線の順に成形されたと推定される。

工具痕を床面で観察すると、他の横穴墓では玄室内から玄門・羨道に向かって工具痕が伸びるものも見られるが、1号横穴墓からはそのような工具痕の規則性は見られなかった。成形が極めて粗雑であるので、この面はあまり意識せず、置土などを施した可能性も考えられるが、調査では置土は確認されなかった。

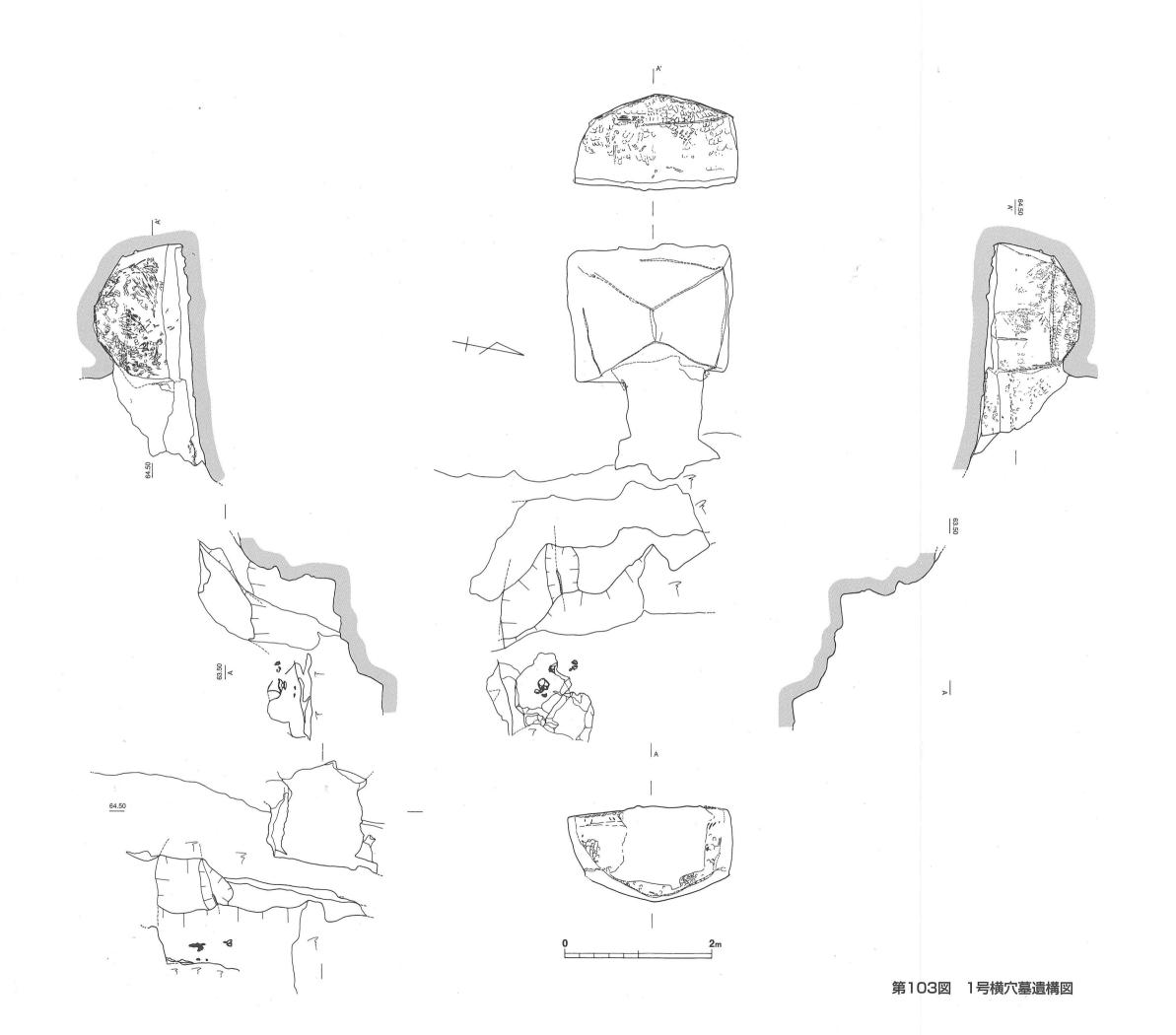
奥壁の立ち上がりは、やや内湾しながら立ち上がり、軒を造った後、少し丸みを帯びながら棟線に至る。一方、側面は左右立ち上がりに相違が見られる。正面左側壁面は、やや丸みを帯びながら直立的に立ち上がり、軒を造った後、内湾気味に棟線に至る。同右側壁面は、内湾しながら内傾し、軒を造った後、内湾気味に棟線に至る。玄門側壁面は風化・剥離が著しいが、丸みを帯びながら直立的に立ち上がり、天井部では直線的に棟線に至る。

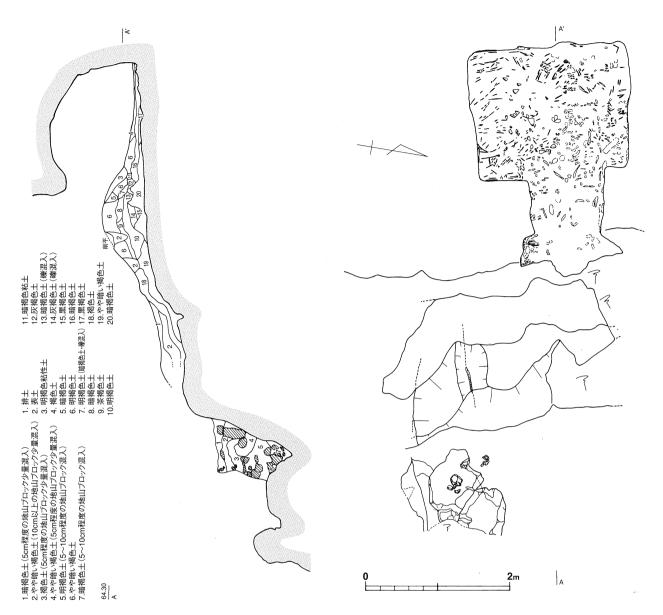
遺物は丹塗の土師質土器の破片が1片出土している。

閉塞状況

盗掘を受けており、閉塞施設も残存していない。

玄室内から土師質土器片が出土していることや、尾根を挟んだ反対側に所在する第19支群の横穴墓から中世土器が出土していることから、盗掘後に何らかの用途に使用された可能性も考える必要があろう。





第104図 1号横穴墓工具痕・セクション実測図

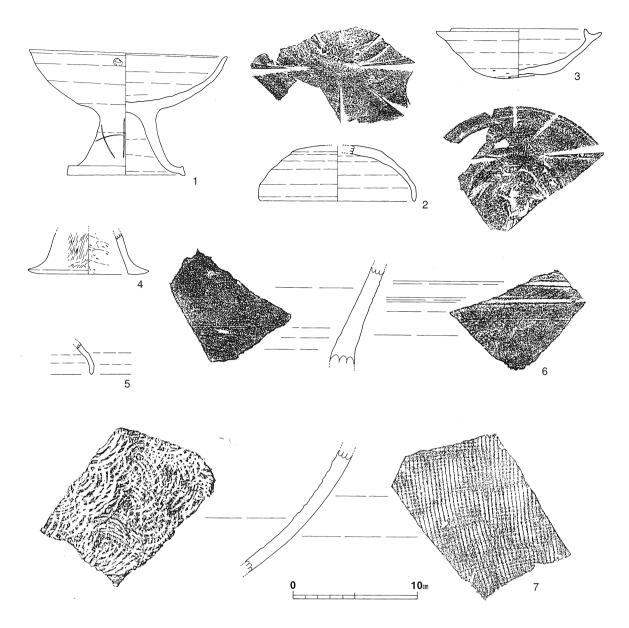
土層堆積状況

玄門付近を頂点として多量の土砂が堆積しており、盗掘は土砂の頂点より玄室に近い側を掘り進めていったものと推定される。

一方、前庭部は横穴墓掘削時のものと考えられる地山ブロックが多量に堆積しており、これを利用 してスロープ状の墓道を形成していた可能性がある。

出土遺物

第105図1~7は1号横穴墓出土遺物である。1は須恵器高坏である。口縁部は緩やかに内湾しながら立ち上がった後、端部でやや外反する。内外面ともに回転ナデを施し、内面見込にナデ、オサエを施す。脚部には透かしを施すが、形骸化が進み縦一直線を呈す。また脚部外面にはヘラ記号「×」が見られる。2は須恵器坏蓋で、外面天井部は風化が著しく調整は不明であるが、内外面に回転ナデ、内面天井部に静止ナデを施している。3は須恵器坏身で、立ち上がりは外方に直線的に伸びた後、口縁部で内面にかえりを作る。内外面ともに回転ナデを施すが、底部に回転ヘラ、内面見込に回転ナデ



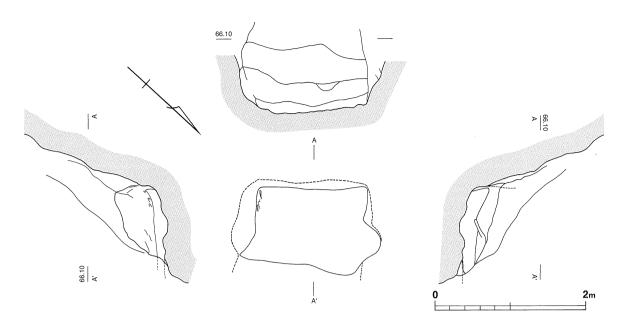
第105図 上塩冶横穴墓群第38支群 出土遺物

後静止ナデを施す。4は丹塗土師器の高坏脚部と考えられるが、底部内面に突出部を作り底部に平坦面を作る。外面にハケ目、内面にヘラ削り調整を施し、外面を赤色塗彩して仕上げている。5は須恵器蓋坏である。内外面ともに回転ナデを施し、端部を尖り気味に仕上げている。6は須恵器甕の頸部で、外面に2条の沈線を施す。外面にナデ、内面に粗いナデ調整を施している。7は須恵器甕の底部に近い部分と考えられる。外面に平行タタキ、内面に青海波文を施している。

2号横穴墓

造墓途中と推定される横穴墓で、凝灰岩に掘削されており、幅0.99m、長さ0.63mを測る。開口方向は $N\sim48^\circ\sim E$ で、3 号横穴墓とほぼ同方向に開口している。土層の堆積が皆無であったため風化が著しく、壁面にわずかに工具痕が残るのみである。

遺物は全く出土しなかった。

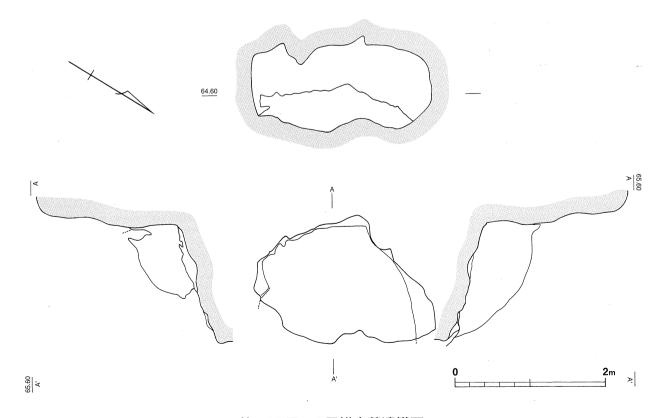


第106図 2号横穴墓遺構図

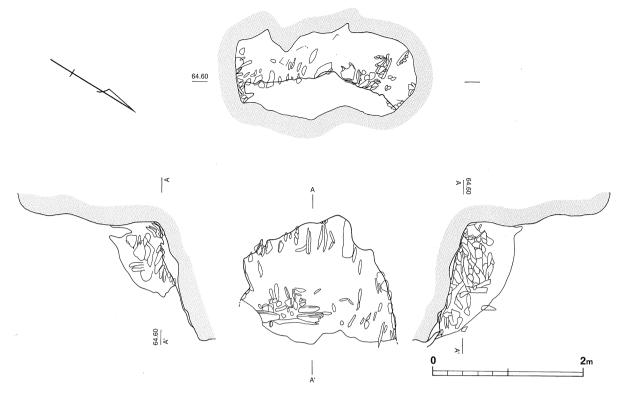
3号横穴墓

2号横穴墓と同じく造墓途中と推定される横穴墓で、凝灰岩に掘削されており、幅1.21m、長さ0.86mを測る。開口方向は $N\sim59^\circ\sim E$ で、2号横穴墓とほぼ同方向に開口している。

奥壁・側壁・床面ともに多数の工具痕が残るが、工具痕を観察すると、幅広のもの、幅細のものが確認でき、造墓においてこの段階においても、数種類の工具を使い分けていた可能性が考えられる。 遺物は全く出土しなかった。



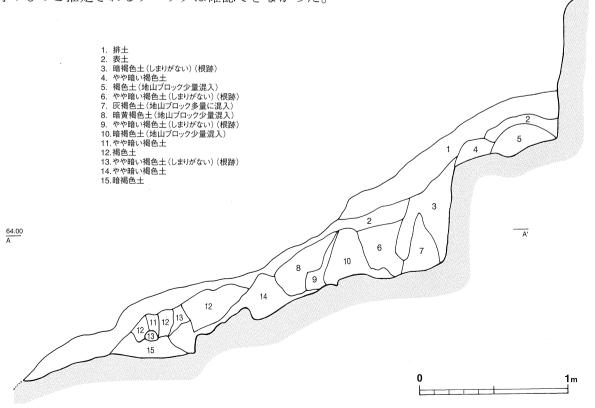
第107図 3号横穴墓遺構図



第108回 3号横穴墓 工具痕検出状況

土層堆積状況

3号横穴墓上方から土層の堆積が見られた。埋土は3号横穴墓の床面奥から堆積し、3号横穴墓手前、3号横穴墓前方の斜面という順に堆積している。1号横穴墓前庭部で見られるような横穴墓掘削時のものと推定されるブロックは確認できなかった。



第109図 2・3号横穴墓 縦断セクション

小 結

上塩冶横穴墓群第38支群は、1号横穴墓の前庭部から数個体の遺物が出土したが、玄室からは丹塗の土師質土器の破片が1片出土したのみであった。これは土層の堆積状況から、盗掘の労力を最小限にするため、掘削を前庭部から行わず、玄門上から掘り進んだため生じたことと推定される。

玄室内から出土した丹塗の土師質土器の破片については、尾根を挟んだ反対側に所在する第19支群の横穴墓から、中世土器が出土している例を踏まえると、日常的なものであるかは不明であるものの、横穴墓が盗掘後、何らかの用途で使用されたことも考えられる。

今回の調査に伴い、造墓について多数の検討課題が得られた。

工具痕の新旧関係から壁や天井の成形順が確認できたが、他の横穴墓については、成形順が第38支 群1号横穴墓と異なる例も多数あり、今後の資料検討に期待するところである。

界線の付け直しについては、上塩冶横穴墓群の中でも何例か事例が確認されているが、上塩冶横穴 墓群発掘調査の一応の終了に伴い検討すべき課題であろう。

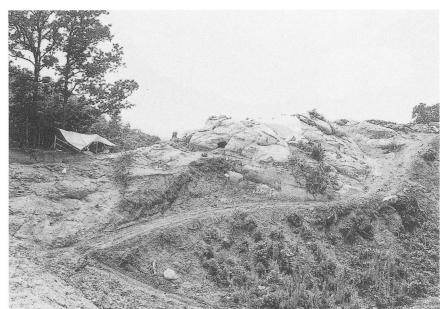
一方、2・3号横穴墓のように、従来造墓途中とされている遺構について、上塩冶横穴墓群でも多数の類例が確認されているが、これらを扱った研究はなく、今後検討の必要があるように考えられる。

上塩冶横穴墓群第38支群出土遺物観察表

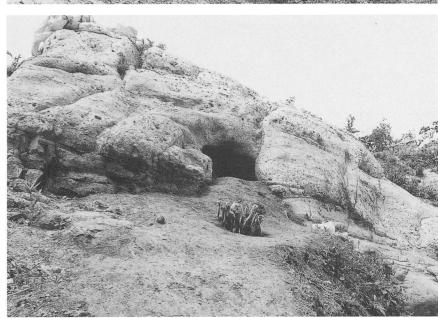
挿図 番号	写真 図版	出土地点	種 別	法量(cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
105-1	図版83	1号横穴墓前庭部 やや暗い褐色土	須恵器 高坏	口径:16.0 器高:10.1 底径:9.5	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 内面見込にナデ・オサエ	1mm程度の 砂粒少量 混入	良好	外面:青灰色 内面:青灰色 内面見込部分は淡青灰色	脚部に透かし・ ヘラ記号 口唇部外面に粘土塊
-2	"	1号横穴墓前庭部 やや暗い褐色土	須恵器 坏蓋	口径:10.4 器高:不明	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 内面天井部に静止ナデ	緻密	良好	外面:暗灰色·灰色 内面:青灰色	gen-
-3	'y	1号横穴墓前庭部 やや暗い褐色土	須恵器 坏身	口径:10.7 器高:3.2 底径:4.0	外面:回転ナデ・回転へラ切り 内面:回転ナデ 内面見込に回転ナデ後静止ナデ	緻密	良好	青灰色	
-4	図版84	1号横穴墓前庭部 やや暗い褐色土	丹隆土師器 高 坏	口径:不明 器高:不明 底径:9.7	外面:ハケ目 内面:ヘラ削り	1mm以下の 砂粒混入	やや軟	外面:淡橙色 内面:淡褐色	脚部内面接地面 に肩を造る 外面赤色塗彩
-5	"	1号横穴墓前庭部 やや暗い褐色土	須恵器 坏蓋	口径:不明 器高:不明 底径:不明	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	1mm未満の 砂粒少量 混入	良好	青灰色	端部を尖り気味 に仕上げる
-6	"	1号横穴墓 表採	須恵器 甕 頸部	口径:不明 器高:不明 底径:不明	外面:ナデ 内面:粗いナデ	1mm程度の 砂粒少量 混入	良好	外面:暗青灰色 内面:暗褐色	外面に2条の沈線
-7	"	1号横穴墓 表採	須恵器 甕 体部	口径:不明 器高:不明 底径:不明	外面:平行タタキ 内面:青海波文	2mm未満の 砂粒混入	良好	外面:暗青灰色 内面:青灰色	底部に近い部分か?

上塩冶横穴墓群 第38支群

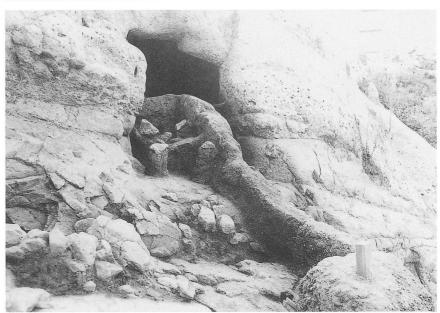
図 版



調査前遠景



1号横穴墓調査前近景



1号横穴墓縦断セクション



1号横穴墓玄門 横断セクション



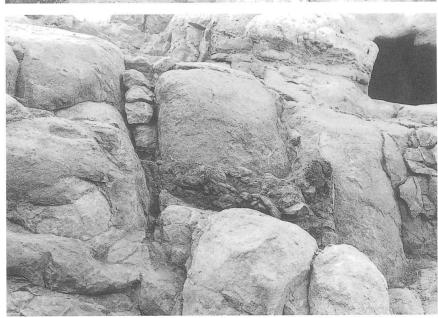
1号横穴墓前庭部 縦断セクション



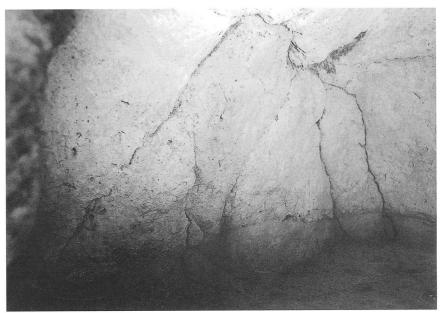
玄室遺物出土状況



1号横穴墓遺物出土状況



1号横穴墓前庭部 横断セクション



1号横穴墓正面左側壁



1号横穴墓正面右側壁



1号横穴墓奥壁



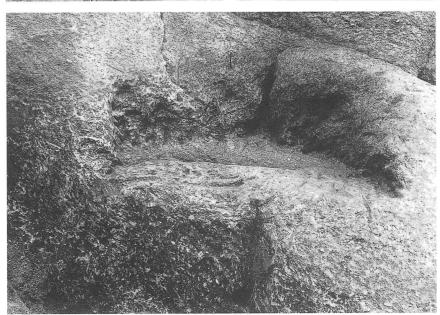
1号横穴墓 床面工具痕(玄室正面から)



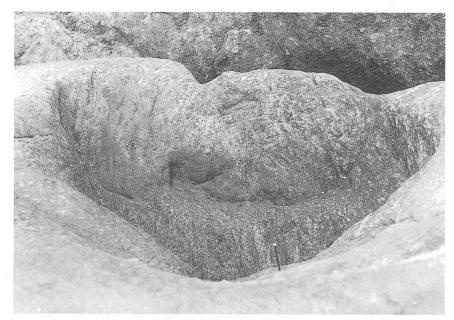
1号横穴墓床面工具痕



3号横穴墓縦断セクション



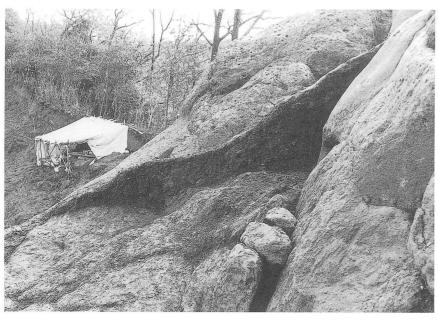
3号横穴墓(正面から)



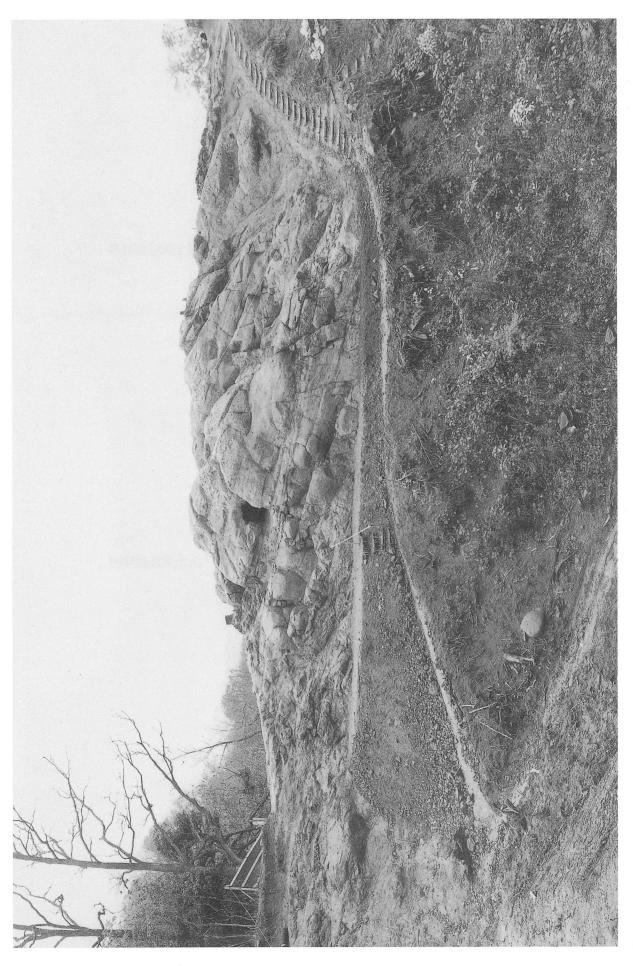
3号横穴墓(上から)



3号横穴墓(斜めから)



2.3号横穴墓土層堆積状況

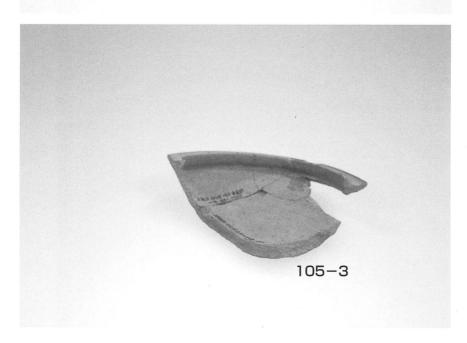




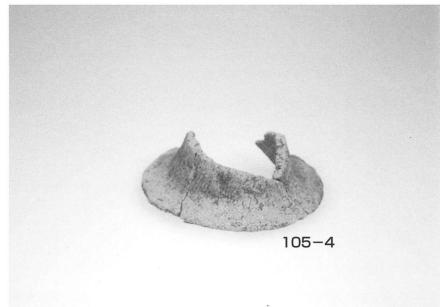
出土須恵器高坏



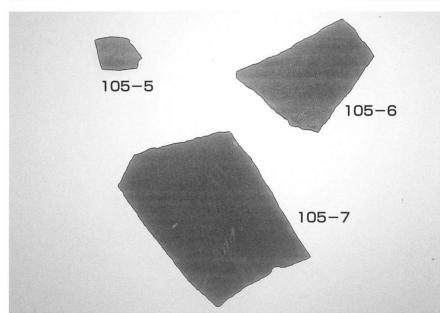
出土須恵器坏蓋



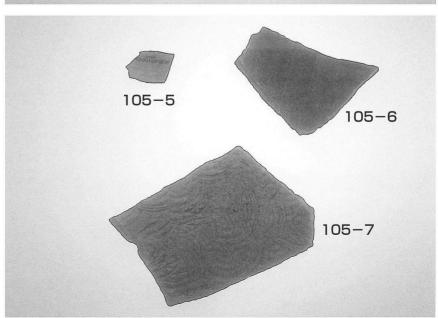
出土須恵器坏身



出土土師器(赤彩土器)高坏



出土須恵器:表面



出土須恵器:裏面

Ⅷ. 上 塩 冶 横 穴 墓 群

Ⅵ. 上塩冶横穴墓群

従来よりこの地域における横穴墓群の存在は知られていたが、近年の開発行為の増大により、多くの横穴墓の発掘調査が実施されている。特に建設省出雲工事事務所によって建設が予定されている斐伊川・神戸川放水路は、上塩冶横穴墓群の中心地を通るため、この工事に伴う発掘調査が実施されている。現在確認されている横穴墓は総数38支群181基に及び、調査された横穴墓は現在把握されている横穴墓数の約半数に達している。

斐伊川・神戸川放水路建設に伴う上塩冶横穴墓群の発掘調査は、出雲市教育委員会が平成10年度に 実施した18支群・19支群・38支群の調査をもって、一段落をみた。そこで、本項ではこれまで調査された横穴墓を一覧表にまとめてみた。

上塩冶横穴墓群に関しては、今まで様々な研究がなされているが、調査の区切りがついたこれから が研究を進めていく良い機会であると思われる。その足がかりとして、現在押さえられている事実を 踏まえて、今後の研究課題の主な事柄を挙げておきたいと思う。

1.玄室形態の多様性とその変遷

横穴墓は多様な玄室形態をもっている。大きくはアーチ形と家形の形態に2分されるが、基本的に この形態の違いは時期差であると考えられている。

アーチ形横穴墓

出雲平野における横穴墓は出雲3期もしくは4期より出現する。出現当初の横穴墓は、そのほとんどの玄室プランは縦長長方形であり天井形態はアーチ形を呈する。これらは比較的軟質の凝灰岩質砂岩に造墓され、出雲4期に盛行している。

上塩冶横穴墓群においても少ないながらこの傾向はうかがえる。アーチ形横穴墓とは断言できないものの、その可能性としては第2群・第4支群などがあげられる。また、調査された例としては第7支群・第33支群・34支群といった支群にみられ、大井谷及び三田谷の入り口付近に造営される傾向にある。

家形横穴墓

一方、出雲 5 期に入ると家形横穴墓が採用され始め、出雲 6 期で盛行する。家形の玄室形態は一般的に石棺式石室の影響であると考えられ、この形態の横穴墓は主に比較的硬質の凝灰岩に造墓されるようになる。また、家形横穴墓は出雲全域に見ることができるが、西部と東部では妻入りと平入りといった違いが見られる。

上塩冶横穴墓群においてもその傾向は顕著であり、上塩冶横穴墓群に造墓される家形横穴墓は妻入り横穴墓がほとんどである。しかし、平入家形横穴墓も全くないわけではなく、少ないながらも造墓

されている。妻入家形横穴墓が全盛の上塩冶横穴墓群の中で平入家形横穴墓の存在意義については今後の研究課題の1つであろう。

横穴墓の変遷

横穴墓は盗掘されている例が多く、その築造時期をはっきりと押さえられる資料は少ない。これまでは横穴墓の形態によって横穴墓の変遷が検討されてきた。その代表的な研究が山陰横穴墓調査検討会の変遷案である。この変遷案では玄室形態に着目し、「アーチ形」を基本形態として、その発展形として軒を加工した「アーチ系切妻家形」、それを更に天井を寄棟に加工した「アーチ形寄棟家形」を提唱している。また、上塩冶横穴墓群において大多数にみられる、平面プランが正方形を呈している「整正家形」を系統外として設定している。

変遷についてはこの変遷案で良いと思われるため、今後はこれまでの調査結果を踏まえた上で変遷 案と造墓時期との相互検討をし、更に裏付けを必要としていると思われる。

墓域の移動

アーチ形横穴墓は三田谷及び大井谷の入り口付近に造墓される傾向がある。また、反対に家形横穴墓(現段階においては「アーチ系切妻家形」・「アーチ系寄棟家形」・「整正家形」の分布については、その分布傾向は認められない。)は入り口付近にほとんど見られない。現段階では時期による墓域の移動を裏付けるような知見を持たないが、上塩冶横穴墓群が三田谷・大井谷の入り口から奥の方へと墓域を移動していった可能性も考えられよう。

2.造墓過程について

横穴墓の中には何らかの理由により途中で造墓をやめてしまったものや、ある程度にまで造墓した 上で埋葬したものなど、造墓過程をうかがわせる資料が増加してきている。

近年、これらを利用して横穴墓の造墓過程について盛んに検討がなされている。これらについて本格的に検討を行ったのは出雲横穴墓検討会である。この検討会においては、横穴墓に残された加工痕や横穴墓の形態を元に造墓過程を復元しようと試みている。

また、これを受け、守岡正司氏によって詳細な検討がなされた。これらは第22支群及び第23支群の中で検討されており、大きく荒掘段階、成形段階、調整段階の3段階の過程により造墓するとしている。

3.上塩冶横穴墓群の被葬者について

被葬者についての論考は非常に数少ない。

出雲3期から出雲7期にかけて造営されてきた上塩冶横穴墓群には、どのような人々が埋葬されているのだろうか。その疑問を解明する方法の一つとして副葬品の質が考えられるが、盗掘の多い横穴

墓ではその1基1基の副葬品をうかがい知ることは困難である。

これまでの研究の成果として、横穴墓の性格は、いわゆる古墳時代後期の群集墳の一形態であることが 位置づけられている。つまり、古墳文化の衰退に伴い、それまで古墳の造営の中心であった支配者層では なく、有力一般人の墓である可能性が指摘されている。そして、横穴墓が造営される数からみても支配者 層の墓にしてはあまりにも多く、その可能性は支持できよう。

一方、第22支群9号横穴墓のように金糸や金環など、装飾品と考えられるものの出土が見られ、相応の地位にいた者が埋葬されていることも考えられよう。このような事実をふまえれば、一定の地位の者だけではなく、幅広い層の者が被葬者の対象として横穴墓が造墓されていたと考えられる。

4.出雲平野の2大横穴墓群

出雲平野には小規模な横穴墓群が平野縁辺部にまばらに分布することが多いが、神戸川を挟んで西側には神門横穴墓群、東側には上塩冶横穴墓群といった、大横穴墓群が形成されている。双方とも100基を超える横穴墓群であるが、上塩冶横穴墓群が家形横穴墓を中心とする一方、神門横穴墓群はアーチ形横穴墓を中心とする。先にも述べたとおり、アーチ形横穴墓から家形横穴墓といった流れから、神門横穴墓群が上塩冶横穴墓群に先行して盛行すると考えられている。しかし上塩冶横穴墓群にもアーチ形横穴墓の存在が確認されているため、双方ともオーバーラップしている時期が存在しているのである。

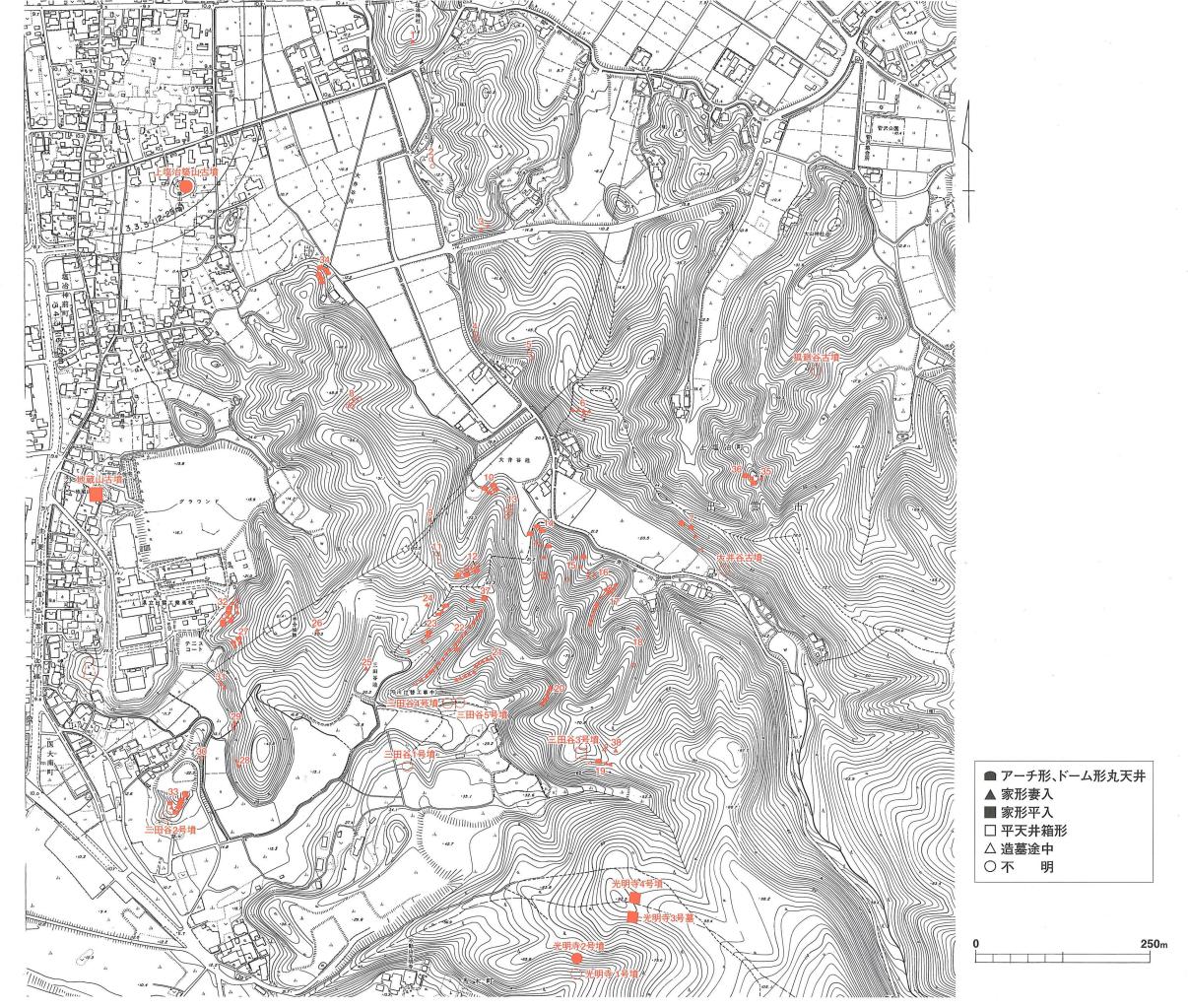
今後は時期や変遷などの問題も含め、出雲平野の横穴墓文化を理解する上では、上塩冶横穴墓群と神門横穴墓群との関連性についても検討が必要となってくるのではないだろうか。

5.横穴墓と終末期古墳との関係

出雲平野においては古墳時代後期に入ってから古墳の築造が盛んとなる。特に上塩冶横穴墓群の位置する神戸川右岸では後期後半には今市大念寺古墳、上塩冶築山古墳、地蔵山古墳といった、首長墓系列の古墳が築造される一方、終末期にはいると古墳の築造数は格段に減り、横穴墓の築造が隆盛を誇るようになる。終末期に入ってから横穴墓の基本形態は家形横穴墓となり、その築造数が激増するのは先に述べたとおりであるが、同時期と考えられる古墳も全くなくなるわけではない。現に上塩冶横穴墓群の墓域中においても三田谷1・2・3・4号墳、大井谷古墳、狐廻谷古墳、光明寺1・2・4号墳と多くの古墳が築かれている。

また、上塩冶横穴墓群の神戸川を挟んだ対岸には42基からなる刈山古墳群が分布している。これらの詳細はほとんどわかっていないが、多くの小規模古墳が分布するといった現状を考えると、古墳時代後期の群集墳である可能性も考えられる。そうすれば横穴墓との時期の関連性もでてこよう。

同様の時期・同様の場所の墓という同じ性格を持ちながら、岩盤に掘り込むものと墳丘を持つものという違った形態をとる意味も含め、古墳時代終末期の墓制を紐解くには、横穴墓と古墳との関係を検討していかなければならないだろう。



上塩冶横穴墓群 一覧表

	##- 	十中TV 45	III I Seedin			時期]				/# +/
支群名	横穴墓名	玄室形態	出土遺物	3	4	5	6	6d	7	文献	備考
1										1	
	1	整正家形 妻入			ļ	_					
						ļ				1	
2	1				<u> </u>	ļ					消滅
	2				<u> </u>	<u> </u>					
					<u> </u>					1	元々10穴
3	2	寄棟家形 妻入			<u> </u>						半壊
	6	アーチ形			_						半壊
			須恵器12 耳環 3		_					1	残存2穴
4	1										半壊
	2				_	_			·		半壊
					ļ					1	ほとんどが崩壊
5	1										
	2 .				_						
					<u> </u>					1	
	1	家形 妻入	須恵器:高坏1・長頸壺1 土師器:坏1	i							
•	2	家形 妻入			1						
6	3	整正家形 妻入	須恵器:坏1・蓋2・長頸壺2	\top		T		Ė			玄室左右に無縁屍床
	4	整正家形 妻入	須恵器:坏身5・蓋5・高坏1・長頸壺2 鉄鏃:釘・直刀								玄室左右に無縁屍床
	5		9/199/V • 9.3 PE / 3								
										1)2	
	1	ドーム形					0				
7	2	ドーム形							-		
	3	整正家形 妻入									
	4	造墓途中	• .								
										1	
	1		-			Ī.,					
•	2						+.				
8	3										
	4										
	5										
										1	
9	1	整正家形 妻入									- 4-
										1	
	1										床面に排水溝
	2	平天井									
10	3	平天井									
	4	平天井									
	5	平天井?									
										1	
11	1										
	2										
										1)2)	
	1	アーチ形	須恵器:甕片								
	2	アーチ形	須恵器:坏蓋3・坏身3・壺1				0	0			
	3										
4.0	4	ドーム形									
12	5										
	6										
	7						1		T		
						1		1	1	ľ	1
	7			+							
	7 8								-	1	
	7 8									1	
13	7 8 9									1	
13	7 8 9									1	

十·#Ұ-⁄~	供ウ草々	士中亚华	III I Neddo			時期	Ŋ.			- Landa B	
又矸石	横穴墓名	玄室形態	出土遺物	3	4	5	6	6d	7	文献	考
										13	
	1	アーチ形	須恵器:坏蓋2・高坏脚部1								
		*	土師器:坏身2		0	0					
			耳環1・刀子1								
	2	アーチ形				<u> </u>	-	-			
		. , , , ,	(万声型・灯芋1 - 灯点 2 - 1 - 小吉 1		-	-	_				
	3	アーチ形	須恵器:坏蓋1・坏身3・1・小壺1 耳環3				0				# · ·
	4	造墓途中			-		<u></u>				
14	4	垣拳述中	須恵器:坏身1				0				
1-4	_		須恵器: 坏蓋1・坏身2・高坏3・壺1・提瓶1								
	5		水晶製切子玉1・水晶製丸小玉1・ガラス製小玉1		10	0					
			鉄製品:刀子 1	ļ							
	6	造墓途中			<u> </u>						
	7	家形 妻入									
	8	家形 妻入	須恵器:坏身1						0		
	9	平天井									
	10		須恵器:坏蓋7・坏身4・平瓶1								
	10	アーチ形	瑪瑙製勾玉 1			0	0				
										13	
			須恵器:坏蓋11・坏身3・高坏1・平瓶2	Ť				-			
	1	家形 妻入	須思辞・小蓋口・小身3・高小1・平瓶2 鉄製品15			0	0				須恵器にヘラ書き文字「各」
15	2	アーチ形	PARTIE V	\vdash	_	-	_	-			
	3	造墓途中		1				_			
				ļ							111 1 344
	4	縦長箱形	須恵器:坏蓋2・坏身2・平瓶(?)1 鉄製品1	ļ							排水溝
				<u> </u>						13	
16	1	家形 妻入	須恵器:坏蓋4・坏身4・高坏2・平瓶1				0				
10	2	造墓途中	Jan. 8								
	3	造墓途中									
										14	
	,	***	須恵器:大甕3・坏身1				(
	1	整正家形 妻入	鉄製品:直刀片				0				
	2	寄棟家形 妻入	須恵器:坏蓋1・坏身1	-							
	3	造墓途中	次心品: 71 至 1 21 21 1	-				-	\dashv		
	4	造墓途中		-							
	5								\dashv		
			/ **								
	6	整正家形 平入	須恵器:壺片		_			_			
	7	切妻家形?妻入	須恵器:坏蓋1・坏身2・甕片	ļ							
17	8	整正家形 妻入	須恵器:坏蓋4・坏身2・長頸壺1・高坏1				0				•
			耳環 2)				
	9	くぼみ	須恵器:坏蓋1・坏身4・平瓶1				0				人 供献用
		\ 10 07	鉄鏃 1		ĺ						大部人円
	10	寄棟家形 妻入	須恵器:坏蓋1・坏身1	[0		П		
	4.4		須恵器:坏蓋1・平瓶1								エリノドに早亡
	11		耳環1・異形銅製品1								両サイドに屍床
	12	造墓途中									
	13	整正家形 妻入		t							
			須恵器:高坏脚部 1								
	14	整正家形 妻入	土師器片								
					-	\vdash		\vdash	-	14	
18	4	家形 妻入	須恵器: 坏蓋 5・坏身 7・長脚無蓋高坏 1		-		\exists	\vdash		(P)	
10	1			-		0	0		-		
	2	平天井?	須恵器:坏蓋1・坏身3 ガラス製小玉1	<u> </u>		Н	0			00	
				_	_		_		,	14	
	1	アーチ系家形				\sqcup			_		
40	2	整正家形 妻入		_							
19	3	アーチ形		L	L]		[
19				1 _	1						
19	4	造墓途中			L	_	'	_	_ '		
19		造墓途中								1)(5)	
		造墓途中 整正家形 平入	須恵器:坏蓋 2 鉄製品:大刀 1				0			1)(5)	
20	4		須恵器: 坏蓋2 鉄製品: 大刀1 須恵器: 坏蓋3・坏身2・長頸壺1				0	0		1)5	

-t-774 6	支群名 横穴墓名		/ A h	III I Nedak			時期	1				м. т.
支群名	横穴基名	玄室刑	態	出土遺物	3	4	5	6	6d	7	文献	備考
	4	整正家形	平入	須恵器:坏蓋1・坏身3				0				
20	5 ,	整正家形	妻入	須恵器:坏身2・甕2 土師器:甕1			0					!
											1)(5)	
	1 .	整正家形	妻入	須恵器: 坏蓋8・坏身6・甕1・皿2・ 高坏3・椀1・長頸壺1 土師器: 皿1 鉄製品: 鉄鏃13					0	0		
1	2	整正家形	妻入	須恵器:甕1・高坏2・椀1			0	0				
	3	整正家形	妻入	須恵器 坏蓋 8・坏身 5・低脚坏 1・高坏 2 高台付坏 1・壺 1・甕 1 鉄製品:直刀 5				0		0		
	4	整正家形	妻入	須恵器:坏蓋3・坏身3 鉄製品:直刀2・鉄鏃4・鉄釘1				0				
21	5	整正家形	妻入	須恵器: 坏蓋8・坏身8・高坏4・高台付坏1・壺1 鉄製品: 鉄鏃1			0	0				
	6	整正家形	妻入	須恵器:坏身片1 土師器:椀1 陶器:椀1								
	7.	整正家形	妻入	須恵器:坏蓋1・坏身1 砥石1				0				
	8	整正家形	妻入	土師器:小皿 古銭2・キセル1								
	9	整正家形	妻入	須恵器:高坏片1								
	10	整正家形	妻入	須恵器:坏身1・高坏1 土師器:小皿1 陶器:擂鉢1				0				
											12	
	1	切妻家形		鉄製品:鉄釘破片	-	ļ	0	0				
	2	切妻家形		須恵器: 坏蓋1・坏身4・壺1 土師器: 坏1 耳環1 鉄製品: 大刀・輪金具1・不明鉄器				0	0			
	3	整正家形	妻入	須恵器:碗1・坏蓋4・坏身6・平瓶1・壺1・ 1 土師器:坏3 鉄器:鉄釘5・馬具?1			0	0	?			
	4	整正家形	妻入	須恵器 坏蓋2・坏身2・壺1・高坏1・甕5・横瓶1 鉄器:刀子2?			0	0				
	5	寄棟家形		須恵器 坏蓋3・坏身3・壺1 鉄器:刀子2・鉄鏃多数			0	?				
	6	整正家形	妻入	須恵器 坏身2・高坏1・壺2			0	0				
	7	整正家形	妻入	須恵器 坏蓋4・坏身6・平瓶1・壺1 鉄器:大刀1?・不明鉄器1・鉄鏃1・鉄釘?4 須恵器:坏蓋1・坏身1			0					Tage:
	8	整正家形	妻入	須恵器 坏蓋1・坏身2・高坏2 土師器:坏身1				0				
22	9	整正家形	妻入	須恵器:坏蓋2・坏身2・高坏3 1・壺1				0				
	10	寄棟家形						_				
	11	整正家形		須恵器:坏蓋2・高坏1	-			10	0	\vdash		
	12 13	整正家形整正家形		鉄製品:大刀・不明鉄器3・鉸具1 須恵器: 坏身1・高坏1 鉄器:鉄釘2	-			0				
	14	切妻家形	女八	須恵器: 坏蓋1・高坏1・壺1 須恵器: 坏蓋1・高坏1・壺1 鉄製品:轡1・不明鉄器4・刀子1・鉄釘4				0				
	15	整正家形	妻入	須恵器: 坏蓋1・坏身1 鉄製品: 鉸具1・鉄鏃1				0				
	16	整正家形	妻入	須恵器: 坏蓋15・坏身8・高坏8・壺3 鉄製品: 鉄鏃1 ガラス小玉3		-		0	0	0		
	17	アーチ形		須恵器: 坏蓋2・坏身1 鉄製品: 大刀1?・刀子2・鉄鏃4				0	?			
	18	整正家形	妻入	須恵器: 坏蓋 4・坏身 4・壺 1・高坏 2 鉄製品: 鉄釘 1 6				0	0			
	19	寄棟家形		須恵器: 坏蓋3・坏身1 鉄製品:鉄斧1・鉄鏃1・刀子1・不明鉄器1			0	0				
	20	造墓途中整正	家形 妻入									
	21	ドーム形		須恵器:坏蓋 4			0					
	21	ドーム形		須思器: <u>外蓋 4</u>			10					

支群名 横穴墓名						時期	1				
支群名	横穴墓名	玄室形態	出土遺物	3	4			6d	7	文献	備考
										12	
			須恵器:坏蓋2・坏身1・高坏4								
	1	アーチ形	│ 土師器:高坏 1 ・坏 1 │ 鉄製品:大刀片 10・刀子 3 ・鉄鏃片 25 環 1			0					
	2	寄棟家形	須恵器 坏蓋2・坏身2 土師器 坏1 鉄製品:鉄鏃5・刀子1			0	0	0			
	3	アーチ形	江印碕 -					0			
00		·	須恵器 坏蓋2・坏身2					$\overline{}$	\subseteq		
23	4	アーチ形	鉄製品:鉄鏃 2 · 刀金具 1 耳環 1				0				
	5	アーチ形	須恵器: 坏蓋4・坏身4 鉄製品: 鉄斧1・大刀1・足金具1・刀子1・鉄鏃4 鉄釘4 銅碗片1・丸玉6			0	0	0			
	6	切妻家形	須恵器:坏身1 鉄製品:棒状鉄器1・鉄刀片2 ガラス小玉1					0			
	7	切妻家形	須恵器: 坏身1 土師器: 高坏1 鉄製品: 不明鉄器1・輪登1・轡引手?1・大刀1 銀装刀金具1・翡翠製勾玉1・ガラス小玉181					?			
24										1	
47	1	整正家形 妻入									
~~										1	
25	2		·	-		_					
					-					(1)	
26	1	整正家形 妻入									
		2223777								1)	
07	1	アーチ形	須恵器: 坏蓋4・坏身7・長脚無蓋高坏1・平瓶2 長頸壺1・金環1			0	0				凝灰岩切石による閉塞
27	2	アーチ系家形	須恵器:坏蓋1・坏身2・長頸壺1			0	0				凝灰岩切石による閉塞
	3	アーチ形	須恵器:坏蓋4・坏身1・平瓶1・甕2			0	0				
	4	寄棟家形	須恵器:甕片数点								
										1	
28	1	整正家形 妻入	須恵器:坏蓋3・坏身5・高坏1	_		0	0				
	2	整正家形 妻入	須恵器:高台付坏 1 					0		1)	
29		整正家形 妻入								U	
, =-		整正家形 妻入									
	-									1	
30	1										
										1	
31	1	家形妻入									家形石棺
	2	家形妻入									
	1	寄棟家形								1	
	2	ロゴ木外バン		-	-				\vdash		
	3	整正家形 妻入									
	4	整正家形 妻入									
00	5	アーチ形									
32	6	寄棟家形									
	7	アーチ形									
	8	寄棟家形									
	9	整正家形を入る。	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·								
	10	アーチ形 アーチ形					\vdash				
	12	アーチ形									
		- 712									
	1	整正家形 妻入									
33	2	アーチ形									
	3	丸天井	須恵器:坏蓋1・坏身1・平瓶1・高坏1 鉄釘				0				
	4	丸天井?	須恵器:坏蓋3・坏身4・提瓶1・横瓶1・平瓶2鉄製品:鉄釘			0	0				

+#¥ <i>4</i> z	横穴墓名	玄室形態	出土遺物		1	時期	a	1		- 	備考	
又矸石	1與八奉 石	五主	山上退彻	3	4	5	6	6d	7	文献	1/用 * 5	
	5	丸天井?	須恵器: 坏蓋2・坏身2・横瓶1・壺1 耳環1・玉類1			0						
33	6	丸天井	須恵器: 坏蓋6・坏身6・提瓶1・高坏1・ 1・甕1 鉄製品: 大刀1・刀子5以上・鉄斧1		0	0					石棺	
	7	丸天井?	須恵器:坏蓋11・坏身5・有蓋高坏6・無蓋高坏3 提瓶3・平瓶1・壺2・甕 土師器:高坏5 耳環1 鉄製品:鉄斧1・大刀柄頭?1・大刀1			0					石棺	
	8	丸天井	須恵器:坏蓋1・坏身4・ 1 耳環2		0	0						
										7		
	1	アーチ形	須恵器:坏身2・坏蓋2	0	0							
	2	アーチ形	須恵器?		0						4期?	
34	3	アーチ形	須恵器:坏身1・坏蓋2 銀環2	0							礫床	
	4	アーチ形	須恵器:短頸壺1・短頸壺蓋1・把手付碗1 鉄製品:鉄製鎌1			0					石棺または棺台	
	5	アーチ形									礫床	
	6	アーチ形										
										2		
35	1	整正家形 妻入	須恵器: 坏蓋45・坏身33・高坏5・ 1・壺3 土師器: 坏身1 鉄製品: 鉄製紡錘車1・刀子1 ガラス小玉1・赤めのう製勾玉1・耳環2			0	0					
										2		
	1	ドーム形	須恵器: 坏蓋11・坏身11・ 1・高坏3・壺2 鉄製品: 大刀1・刀金具1				0					
36	2	整正家形 平入	須恵器: 坏蓋3・坏身3・高坏2・壺1 鉄製品:大刀1				0	0				
	3	ドーム形	須恵器: 坏蓋6・坏身5・高坏2・壺1・甕3 鉄製品: 刀子1・鉸具1・轡金具2・馬具1・鉄鏃3				0	?				
07										2		
37	1	アーチ形	鉄製品:鉄釘1·鉄滓									
		-								4		
38	1											
30	2											
	3										- Mari	

- 参考文献
 ① 門脇俊彦「上塩冶横穴墓群」(建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財発掘調査報告』1980)
 ② 建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会『上沢Ⅱ遺跡 狐廻谷古墳 大井谷城跡 上塩冶横穴墓群(第7・12・22・23・33・35・36・37支群)』1998
 ③ 建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会『大井谷石切場跡 上塩冶横穴墓群第14支群 上塩冶横穴墓群第15支群 上塩冶横穴墓群第16支群』1997
 ④ 本書
 ⑤ 島根県教育委員会・建設省出雲工事事務所『上塩冶横穴群第20・21支群』1995
 ⑥ 出雲市教育委員会『半分城跡横穴群発掘調査報告』1979
 ⑦ 出雲市教育委員会『上塩冶横穴墓群第34支群発掘調査報告』1998

哑. 大 井 谷 Ⅲ 遺 跡

Ⅷ.大井谷Ⅲ遺跡

調査の概要

大井谷Ⅲ遺跡は大井谷の奥に派生した小さな谷に面する日当たりの良い斜面に位置し、遺跡の西には三田谷3号墳、北には上塩冶横穴墓群第18支群1~2号横穴墓、南には同群第38支群1~3号横穴墓が確認されている。

試掘では柱穴の可能性が考えられる黒褐色溜が多数検出されており、土師質の土器が少量ではあるが確認された。

試掘の結果から当斜面には何らかの遺跡が存在する可能性が考えられたため、当斜面の全面発掘を 実施した。調査は調査区上面を重機で掘削した後、人力で徐々に掘削した。

調査の結果、遺物が少ないため詳細は不明であるが、300穴以上のピット・土壙が検出された。

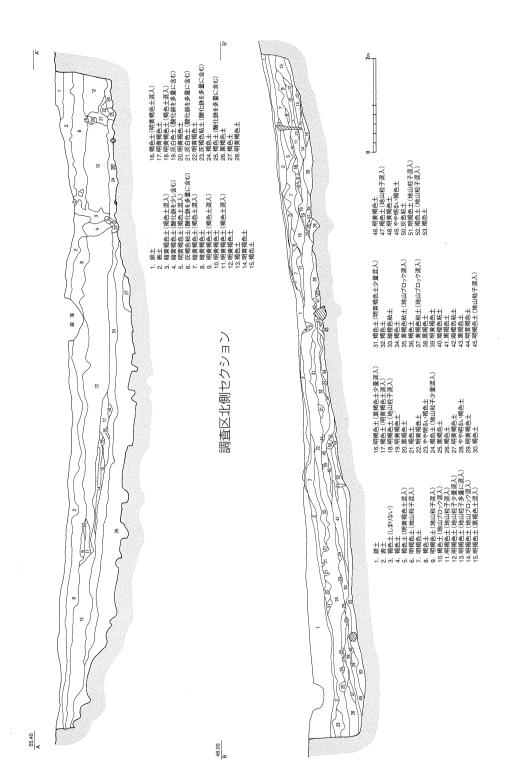


第111図 大井谷Ⅲ遺跡位置図(明治32年帝国陸軍測図5万分の1)

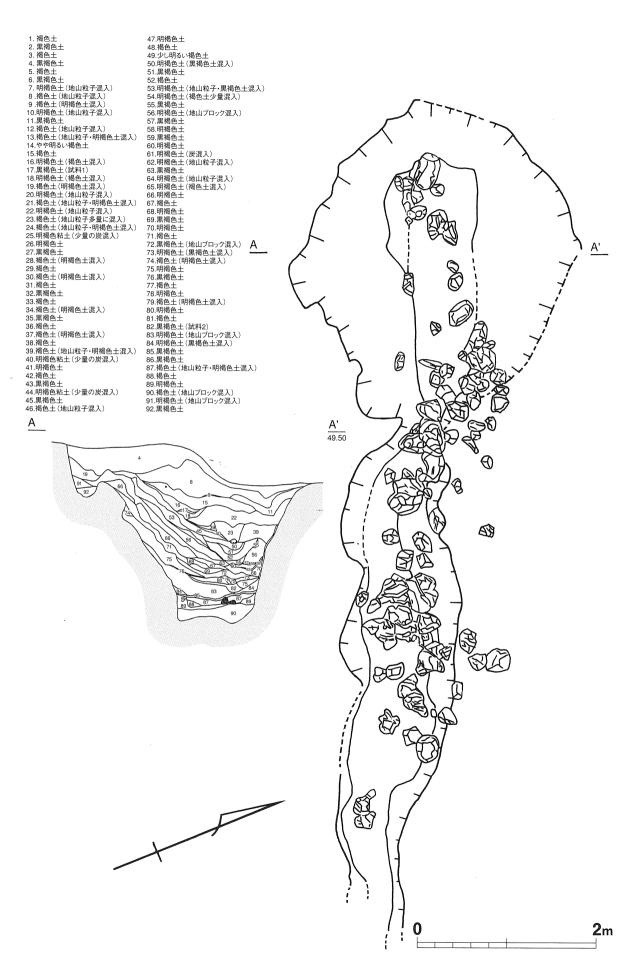
S X 0 1

調査区中最も大きな土壙で、長径約3.7m、短径3.3mを図る。また斜面下に向かって幅約1.0m、長さ5.5m以上の溝が伸びるが、切り合い関係が見られないため、同一の遺構と考えている。谷の中央に位置するためか、基底部では地下水が流れている。壁は東西ともに外反気味に立ち上がり、床は平坦面を造る。埋土は有機物層を幾層も挟んでおり、基底部に近い層からは、多数の転石のほか、石匙や風化の著しい土器が1片出土している。一方、溝部分からは転石に混じり須恵器の高台付坏や土師器、土師質土器が出土している。転石の石材は付近の岩盤に見られる凝灰岩が多く見られるが、付近では見られない石材の転石もあり、石を付近に持ち込んでいる可能性がある。

第112図 大井谷皿遺跡 遺構全体図



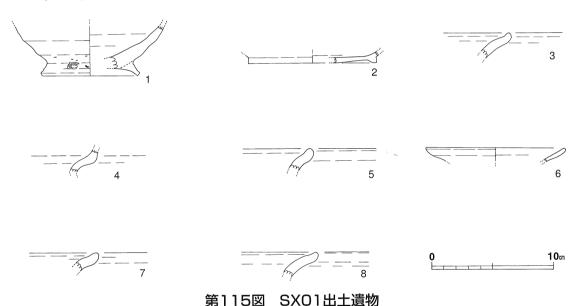
調査区南側セクション



第114図 SX01遺構図

SX01出土遺物

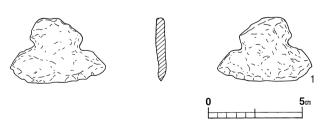
第115図1~7はSX01出土遺物である。1は須恵器坏で、底部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、体部に軽いくびれを作る。口縁は端部を欠損しているが、内外面ともに回転ナデを施し、内面見込にナデ調整を施す。底部は回転へラの後、高台を貼り付け、回転ナデ調整を施している。2は土師質土器である。風化が激しく不明な点が多いが、高台には回転ナデを施している。3は土師器で、口縁部の立ち上がりは、緩やかに外反した後、端部で内側にくびれを有する。風化が激しく、内外面ともに調整は不明である。4も土師器で、欠損が著しく不明な点が多いが、立ち上がりは外反した後内側にややくびれる。5も土師器である。やはり欠損が著しく不明な点が多いが、口縁部の立ち上がりは外反した後端部で内側にややくびれる。調整は内外面ともにナデを施している。6は土師質土器である。口縁部の立ち上がりは外方に直線的に伸び、端部でやや肥厚する。風化が著しく調整は不明である。7は土師器である。口縁部の立ち上がりは外反した後内側にくびれる。端部は丸く仕上げ、内外面ともにナデ調整を施す。8も土師器で、口縁部の立ち上がりは外反した後口縁端部で内側にくびれる。内外面ともにナデ調整を施すが、口縁端部は風化が著しく調整は不明である。



第115図1は石匙で、SX01の基底部に近い層から出土したが、共伴遺物は皆無であった。

二等辺三角形状の剥片を加工しており、左図で図示した面が材料になった石材との剥離面と考えられる。二次加工では等辺二辺を刳り込み、斜辺に刃を作り出している。

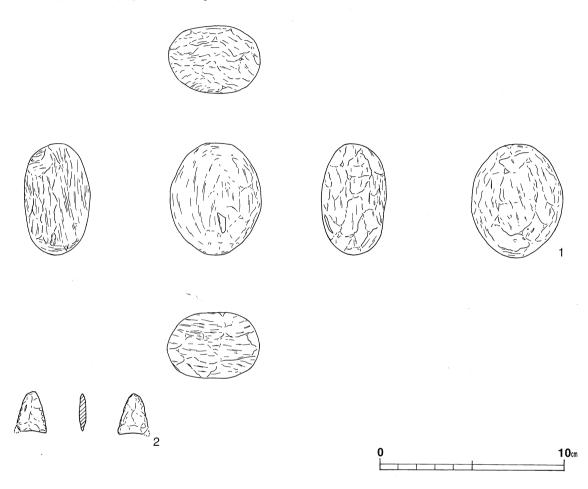
縦3.4cm、横5.1cm、厚さ0.5cmを測り、石材は 流紋岩と考えられる。



第116図 SX01出土石匙

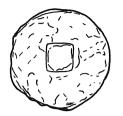
遺構外出土遺物

第117図1は砥石である。縦6.1cm、横5.0cm、厚さ3.5cmを測り、やや扁平な卵状を呈す。石材は流紋岩質凝灰岩で、若干の風化は認められるものの、全面を砥石として使用したと考えられる。2は石鏃で縦2.2cm、横1.6cm、厚さ0.35cmを測り、縦長の二等辺三角形に近い形を呈する。等辺二辺には刃を作り出し、底辺はやや内反している。



第117図 出土遺物(石器)

第118図1は鉄銭の可能性がある遺物である。径2.4cm、厚さ0.2cmを測り、中央に6.5×7.0mmの方形状の穿孔が見られる。2は一銭銅貨であるが、風化が激しく凸部の磨耗が著しい。詳細は不明である。











第118図 出土遺物(古銭)

まとめ

調査の結果、付近に横穴墓や古墳などが点在する当調査区も遺跡であることが確認された。全体的 に遺物が少量であるため、遺構の詳細は不明である。

調査区からは300穴以上のピットが確認されているが、これらは全体的に小型で不成形なものも多いことから、建物跡であったかどうかは不明であるが、仮屋のような建物が建っていた可能性は考えられる。

一方、SX01は遺構の性格は不明であるが、遺構の埋土からは 14 C年代測定の結果が得られた。SX01の埋土は全体的に明褐色の色調であったが、試料採取層(17層、82層)は黒褐色であり腐植物が含まれている様相を示した。試料採取は川崎地質株式会社が行ない、試料採取後試験室にてカビなどの発生を押さえるために、 60° Cに設定した乾燥機内で24時間以上かけて乾燥させた。また、 14 C年代測定は米国ベーター社(Bata Analalytic Radiocarbon Dating Laboratory)で行った。

表1は¹⁴C年代測定の結果である。

試験 No.	層準 (層No.)	測定年代 (y.B.P.)	δ ¹³ C (‰)	補正 ¹⁴ C (y.B.P.)	暦年代* ¹ (cal y.)	測定番号 (Bata-)
1	17	1.110 ± 50	-18.3	1.220 ± 50	AD685~960	119,213
2	82	$1,180\pm 50$	-19.8	$1,270\pm 50$	AD665~885	119,214

*1: 2 sigma,95%probability

試料1及び2からは、7世紀後半から10世紀後半という結果が得られており、これはSX01の堆積物である遺物の時期ともおおよそ合致する。また堆積物には付近に見られない石も含まれており、この時期に石を当地に持ち込んだ可能性も考えられる。

これらについては、類例の増加を待って改めて検討することとしたい。

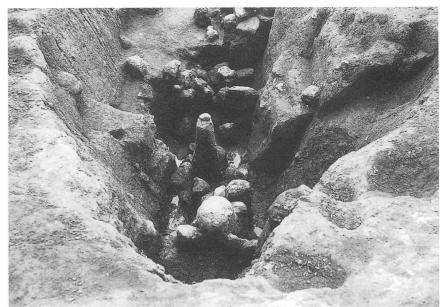
大井谷皿遺跡出土遺物観察表

挿図 番号	写真 図版	出土地点	種 別	法量(cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
115-1		SX01	須恵器	口径:不明 器高:不明 底径:7.9	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 内面見込にナデ	1mm程度の 砂粒少量 混入	良好	青灰色	底部は回転へラ の後、高台を貼付。 高台外面に粘土塊
-2	図版90	SX01	土師質土器	口径:不明 器高:不明 底径:10.5	外面:ナデ 内面:磨き?	1mm程度の 砂粒混入	やや軟	外面:淡黄褐色 内面:暗褐色 断面:淡黄褐色	高台を造る
-3	11	SX01	土師器	口径:不明 器高:不明 底径:不明	外面:風化のため調整不明 内面:ナデ	1~2mmの 砂粒多量 に混入	軟質	外面:橙色 内面:暗黄褐色 断面:橙色	端部で内側にく びれる
-4	"	SX01	土師器	口径:不明 器高:不明 底径:不明	外面:ナデ? 内面:磨き?	lmm程度の 砂粒混入	軟質	外面:淡黄橙色 内面:淡黄褐色 断面:暗褐色	二重口縁を呈す
-5	"	SX01	土師器	口径:不明 器高:不明 底径:不明	外面:ナデ 内面:ナデ	1~2mm程 度の砂粒 混入	軟質	外面:暗黄褐色 内面:暗黄褐色 断面:淡黄褐色	端部で内側にく びれる
-6	"	SX01	土師質土器	口径:不明 器高:不明 底径:11.4	外面: 風化のため調整不明 内面: 風化のため調整不明	密	軟質	橙色	端部でやや肥厚
-7	"	SX01	土師器	口径:不明 器高:不明 底径:不明	外面:ナデ 内面:ナデ	1~2mmの 砂粒混入	軟質	外面:於聯聯體 内面:淡黄橙色 断面:淡灰橙色	端部で内側にく びれる
-8	<i>"</i>	SX01	土師器	口径:不明 器高:不明 底径:不明	外面: ナデ 内面:ナデ 口縁端部は風化のため調整不明	1〜3mm程 度の砂粒 混入	軟質	外面:暗黄褐色 内面:暗黄橙色 断面:橙色	端部で内側にく びれる

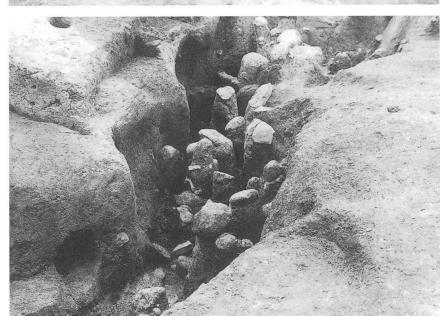
挿図 番号	写真 図版	出土地点	種 別 磁 器	法量(cm)	備考
116-1	図版90	SX01	石匙	縦:3.4 横:5.1 厚:0.5	二等辺三角形状の剥片を加工。二次加工で等辺二辺を割り込み、 斜辺に刃を造り出している。
117-1	"	包含層	砥石	縦:6.1 横:5.0 厚:3.5	やや扁平な卵上を呈す。石材は流紋岩質凝灰岩で、若干の風化 は認められるものの、全面を砥石として使用していたものと考 えられる。
-2	"	包含層	石鏃	縦:2.2 横:1.6 厚:0.35	縦長の二等辺三角形に近い形を呈す。等辺二辺には刃を造り出し、底辺はやや内反する。
118-1	図版90	包含層	鉄銭?	径:2.4 厚:0.2 孔径:0.65×0.7	方形状の穿孔あり。
-2	"	包含層	1銭銅貨	径:2.7 厚:0.15	風化が激しく凸部の磨耗が著しい。

大井谷Ⅲ遺跡

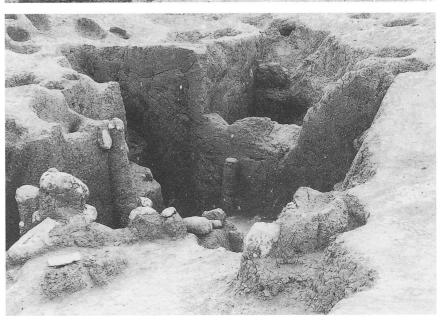
図 版



SXO1石検出状況1



SXO1石検出状況2



SXO1土層堆積状況



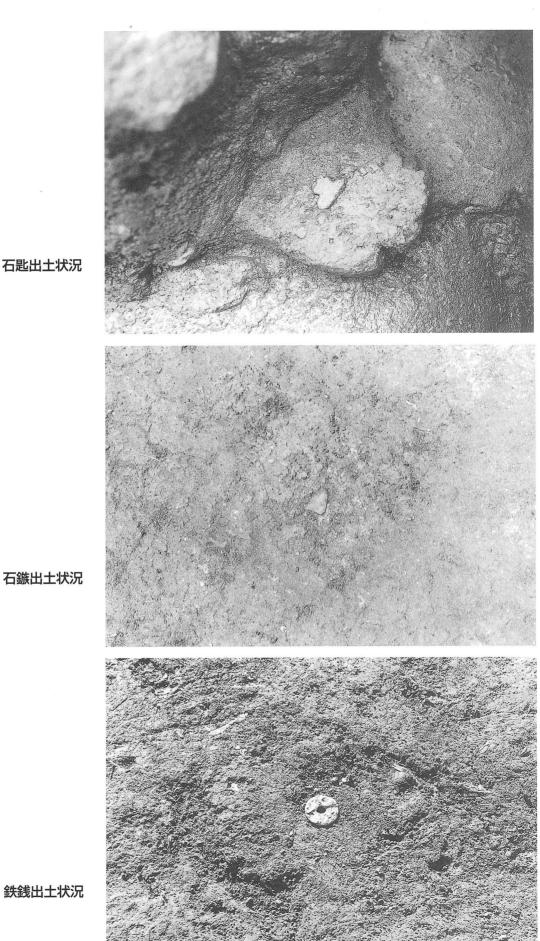
S X 0 1 土層堆積状況2



SXO1遺物出土状況



S X O 1 遺物出土状況2



石匙出土状況



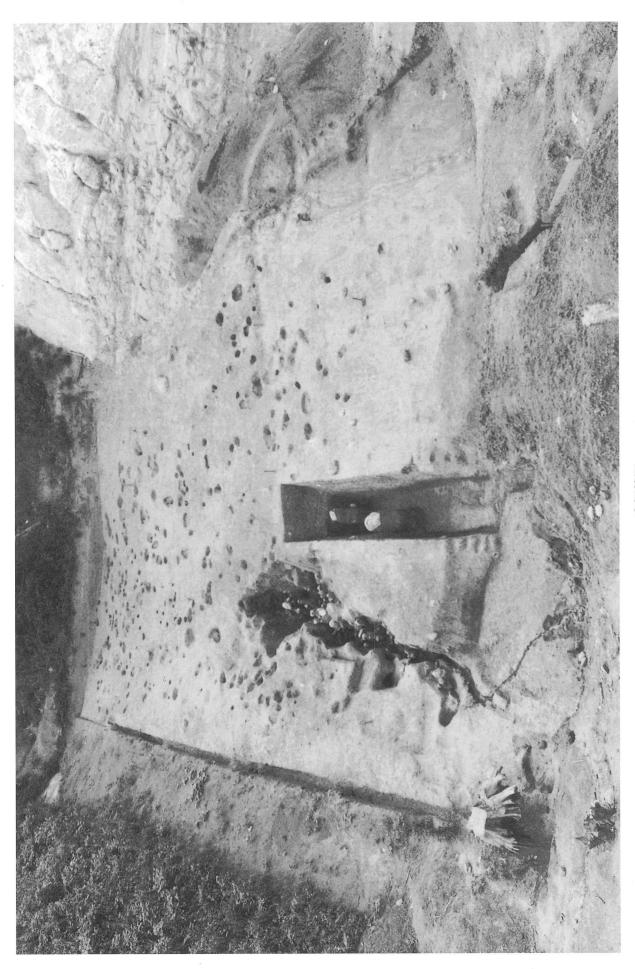
一銭銅貨出土状況

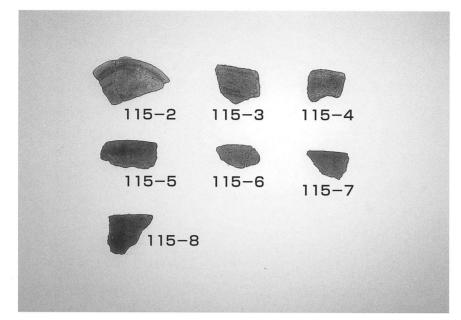


作業風景

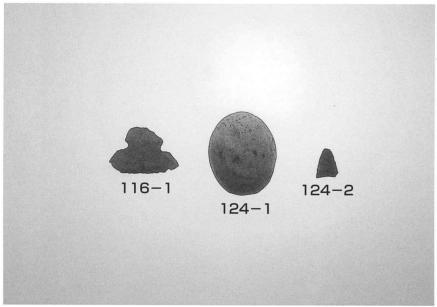


検出状況(全体)

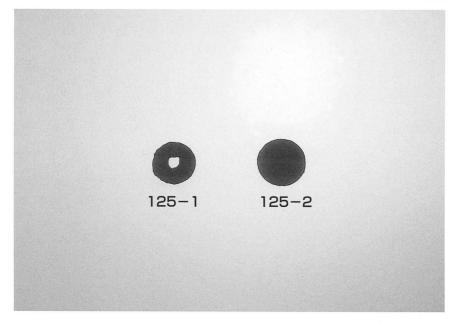




出土土器



出土石器



出土古銭

区.石切場跡1

IX.石切場跡1

上塩冶横穴墓群第19支群と38支群のある尾根の頂部に位置している。

加工痕は大きく分けて3カ所にあり、少なくとも3回、しかもそれぞれ異なった方法で切り出されたものと推定される。

(1) 一番大きな石を切り出したと思われる加工痕が残っており、四角く切り出したものと思われる。 その切り出し方は、まず周り3方向に上からノミ等の工具で溝を造る。次に溝から横方向に石を 剥がすようにノミを入れる。

この切り出し方は江戸時代に盛んだったヤ(くさび)を用いたものではなく、限られた工具を用いての作業であったと考えられる。よく似た例が奈良県二上山付近に位置する高山石切場遺跡や 穴虫石切場遺跡で確認されている。

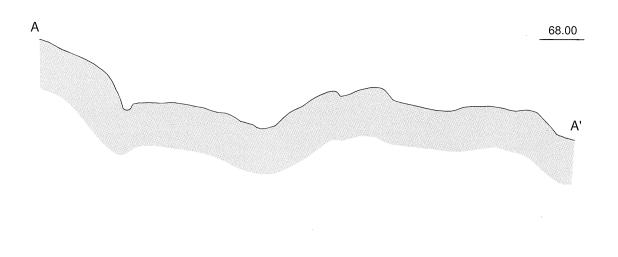
これは、古墳の組合せ石棺や寺院等の基壇用の石を切り出したものと考えられている。

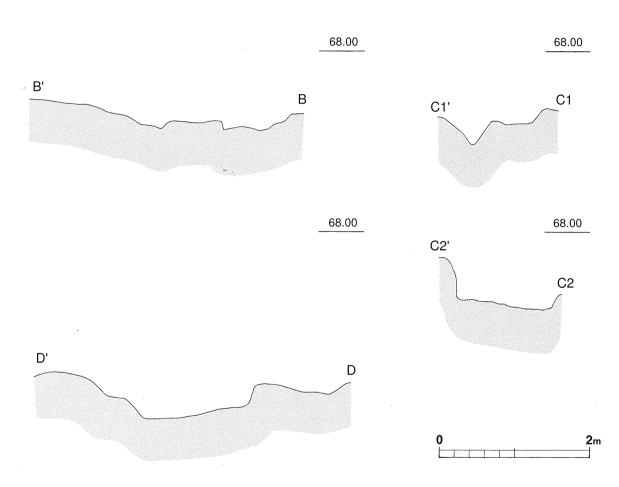
- (2) 周りから縦にノミで石を切り、大きな石材を切り出そうとしたものと思われる。 しかし、(1) のように方形の板状の石を切り出したのではなく、大きな石のかたまりを切り出し、 のちに加工したのではないかと思われるような粗い切り出し方である。
- (3) 岩盤の角の部分を使った、江戸時代にも見られるような場所を切り出している。しかし、用いている道具は(1)(2)と変わらないため、切り出した時期はそれほど変わらないものと思われる。 それほど大きな石ではなく、割と小さなものを切り出している。

19支群1号横穴墓、2号横穴墓で閉塞石が使われているが、これらの石と切り出された跡の大きさ、厚さが異なるため、、これは別な場所で切り出され、運んでこられたものであろう。

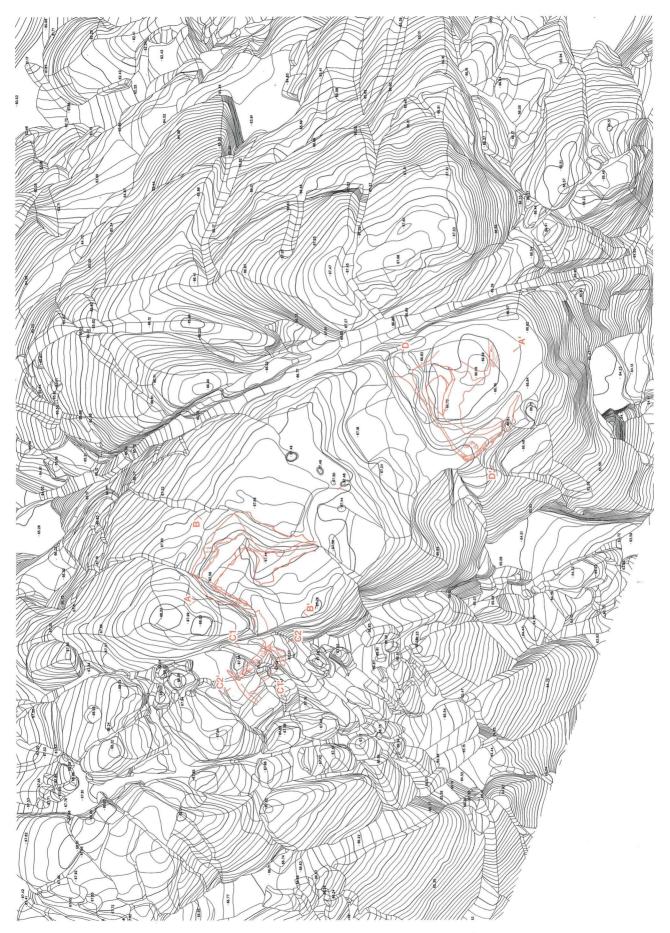
この3カ所から切り出された石は、横穴に影響しないように切り出されているように見られることから、おそらく横穴墓構築後に切り出されたものと思われる。しかし、時期などを特定できるような遺物が出土しなかったこと、また尾根の頂部に位置しており堆積土がほとんどなかったために横穴墓との前後関係を確認することはできなかった。

南東側の斜面でも石切場が確認されており、この辺りが古くから石切場として利用されていたことが窺える。





第119図 石切場跡1 断面図

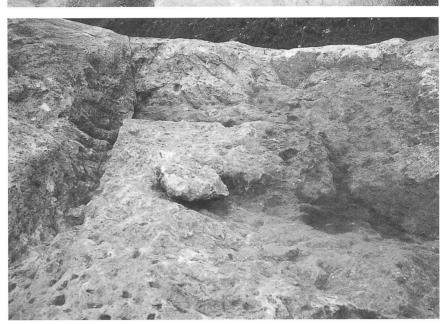


第120図 石切場跡1 平面実測図(1:80)

石 切 場 跡 1 図 版



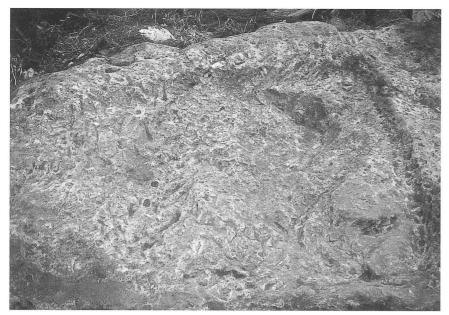
石切場跡1 土層堆積状況



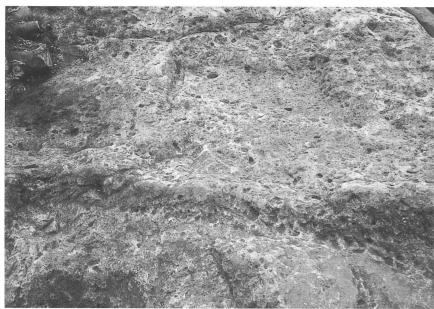
石切場跡1 (中央)



同上(工具痕)



石切場跡1(南東側)



同上(工具痕)



同上 (北西側)